

顔面うっ血およびツキノワグマ徴候の出現頻度（第3報）

○長崎 靖、近藤武史、山崎元太郎、杉村朋子、倉田浩充、主田英之、上野易弘、
西村明儒、粕田承吾（兵監医）

【緒言】

ツキノワグマ徴候(月輪)とは上胸部及び頸部全周性の紫赤色調変色で、死後、怒張した頸静脈から毛細血管へ血液が逆流することによって生じる死体現象である。顔面鬱血(顔鬱)と共に、第1報では疾病での(表 1)、第2報では外因死における出現頻度(表 2)を報告した。今回、件数が最も多い心不全状態での発生率を検討した。

表 1 疾病種類別出現頻度(%)

疾病分類	例数	顔鬱	月輪
1)悪性新生物	19	0.0 %	0.0 %
2)不整脈	145	20.0 %	17.2 %
3)心膜血腫 AMI	21	38.1 %	47.6 %
4)急性心疾患	277	53.8 %	45.8 %
5)慢性心疾患	25	20.0 %	16.0 %
6)心膜血腫 Aortic	37	43.2 %	37.8 %
7)大動脈破裂	21	0.0 %	4.8 %
8)肺動脈血栓	21	33.3 %	33.3 %
9)脳内出血	19	38.5 %	30.8 %
10)クモ膜下出血	22	72.7 %	50.0 %
11)肺炎	75	10.7 %	4.0 %
12)消化器疾患	74	16.2 %	14.9 %
13)病的誤嚥	16	37.5 %	25.0 %

表 2 外因種類別出現頻度(%)

外傷分類	例数	顔鬱	月輪
1)頭部外傷	58	19.0 %	13.8 %
2)頸髄損傷	8	12.5 %	0.0 %
3)多発肋骨骨折	7	28.6 %	14.3 %
4)失血	41	2.4 %	2.4 %
5)中毒	35	48.6 %	42.9 %
6)熱中症	16	12.5 %	6.3 %
7)低体温症	28	7.1 %	0.0 %
8)絞頸・絞頸	245	53.9 %	28.2 %
9)誤嚥窒息	47	40.4 %	23.4 %
10)溺水	45	40.0 %	24.4 %
11)低酸素	16	37.5 %	31.3 %

【対象および方法】

対象は 2012 年 1 月から 2024 年 6 月までに兵庫県監察医務室で解剖し、急性虚血性心疾患(ICD10: I21～I24)と診断され、心不全状態が示

唆される両肺合計重量が 1 kg 以上、前面および側面に死斑の認められなかった 1,069 例。方法は、外表写真から顔鬱と月輪の有無を調べた。

【結果】

対象例中、顔鬱は 54.4%に、月輪は 53.5%に認められた。死後経過による陽性率の変動を年齢別に示す。

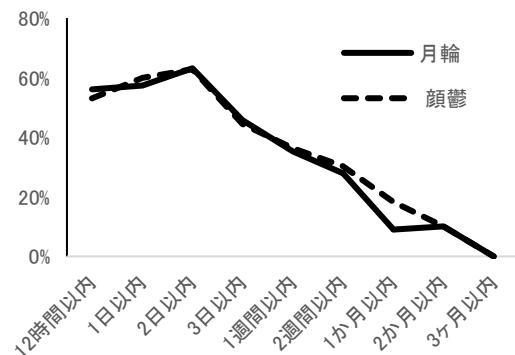


図 陽性率の死後経過による変動

いずれも、死亡時の中心静脈圧高値が予想される若年者ほど、早期から強く認められた。心不全では月輪と顔鬱の出現率に殆ど差は認められず、重力に抗しての血液移動であるためか、死斑に比べて出現が緩徐と考えられた。

【考察】

月輪や顔鬱は、腹臥位でも、死後経過とともに頂部を中心とした変色として認められる。この遺体を仰臥位で検案した際、死斑の転移と紛らわしい。頸部内景所見においても色調への影響が示唆された。今回、静脈圧上昇が予想される死因病態を選択したが、発生率5割強であった。また、頸静脈圧の上昇は、心不全以外でも種々の静脈血流障害により生じる。発生率の低さと原因の多様性から、変色を直ちに死因に結びつけるのは危険かもしれない。ただ、多くの警察官や警察協力医に語り継がれてきた変色であり、メカニズムを理解しておくことは、法医学者に警察官や警察協力医に対する指導的役割があるとすれば、重要であると考ええる。